

子飼商店街的雛祭考 - 商店街各店が店の前に雛飾りをするようになりました -

「あん人は、このごろ、太らしたもんな。」

「ありゃ、抗がん剤の副作用てよ。」

「そうな。そりゃ、薬の効きすぎちゃおらんね。困ったもんたい。」

「あら、あは、ちかごろ顔の見えんだったが、なんしとったつね。」

「こないだ、白内障ば手術したったーい。」

「なーんね、あは、まだしとらんだったつね。あたしゃもう、はよーしてもろた。」

子飼レトロ通り商店街は、午前中、お年寄りで賑わう。11時が買い物客のピークである。事務所の中にも、表の通りからお年寄りの元気な声が聞こえてくる。上記のような会話ができるようになったら、いわゆる「老人力」が付いたことになるのだろう。私には、目の手術は恐ろしくて大変なことだが、お年寄りにかかると、ハシカかおたふく風邪みたいなもののように。まるで、それを経験しないと次のステージに進めないような感じである。凄すぎる。

そんなお年寄りを見ていたら、26年前に亡くなった祖母を思い出した。祖母は、晩年緑内障になり手術して義眼を入れた。最初は元気をなくしていたが、そのうち慣れてきて、自分で上手に義眼を出し入れできるようになった。昔の年寄りのことであり、乱暴なもので、すべりが悪いときは、義眼を口に含んで湿らせてからするりと目の穴に押し込んでいた。たまにコンタクトレンズを舐める人を見るが、義眼を舐めるところはめったに見れない。本人は、消毒も兼ねていたようだ。子どものスリ傷ぐらいいは、ツバつけときゃ治る。間違いない！

お年寄りが会話する様子は面白い。例えば、5メートル離れたところでお互いを発見したとする。そして、その瞬間に会話が始まると、ずっと5メートル離れたままで、大きな声を出して話し続ける。近寄って話せばよさそうなものだが、不思議とそうならない。話が終わって「それじゃあ、また」とお辞儀をして別れ、それから5メートルの距離を縮め、会釈もせずすれ違って、ショッピングカートを押してサッサカ歩いていく。子飼商店街にいと、カートを杖代わりにしたお年寄りが、このように会話を交わす場面に遭遇することができる。

雛祭りシーズンになり、商店街の有線放送から「雛祭りソング」が流れはじめた。世の中に雛祭りの歌がこんなにたくさんあることを、ここに事務所を構えてはじめて知った。

お雛さまの歌の中を、お雛さまが行き交う商店街。ある社会福祉法人が、商店街に来るお年寄りの生活時間を調べた。その結果、確かに午前中に買物を済ませる人が多かった。午後は、友人訪問や習い事などを行っているらしいが、それはいったいどんな内容か。どんな気持ちで時間を過ごしているのか？・・・「年寄りのことは年寄りにしか分かん」と呟いた。そして、表に飾るつもりの折り紙のお雛様の顔にボールペンで皺を入れてみた。笑えるが悪趣味だ。